物語文学の成立における
複数の作者を構成する読者群の設定

吉川寿洋

紫式部日記の御草子つくりの段に「御前(おんまえ)には、おんさうし、つくりいとなませ給ふとてあけたてば、まづむかひさぶらひて、いろいろの紙えりととのへて、物語の本でもそえつつところどころにふみかきくばり、かつはとぢあつめしたたむるをやくにて、あかしくらす。」とあり、これによって、式部がほうぼうへ写本の依頼の手紙をものしたり、できてきたものをとじたりしたことが知られるが、いっぽう、昭和三十二年になって発見された仮題「馬内侍歌日記」の原本第十七葉目にも「物がたりのきよがきせさせ給て、ふるきはつかさの人にくばらせたまへば、ものがたりのかみ、みぶのもとにやるとて」なる記事

が見え、寛弘（元年＝一〇〇四）以前、寛和二、三年（九八六・七）ごろ、村上天皇の皇女、大斎院選子のもとで、かなり多くの侍女を動員して大規模な物語の清書がなされたことが伝えられている。又さきに引用した紫式部日記の記事に続いて、「つぼねに、物語の本ども、とりにやりて、かくしおきたるを」（引用は朝日古典全書本）式部が中宮の御前に出仕している間に道長がこっそり彼女の局にやって来てさがし出し、中宮の御妹である尚侍に献上してしまった。そこで「よろしうかきかへたりしは、みなひきうしなひて、ところもとなき名をぞ、とりはべりけんかし」と心配しているところが示されている。以上のような資料に、ほぼ時期を同じくしてなったと思われる、「無名草子」及び「白造紙」の源氏物語に関する部分の叙述（注　この両者の関係についての考察は稲賀敬二氏「源氏物語『巣守巻』考」広島大学文学部紀要第14号に詳しい。）を合わせて考える時、物語享受者の間に幾らかの群（グループ）（サロン的なものをその最も大規模なものとして）を想像することが可能になると思われる。そして、その群（グループ）と群（グループ）との間においては、源氏物語の享受の仕方において、ある程度の相違があったろうとも考えられる。その相違は定稿と未定稿との差違によるものであったり、書写の誤りのためでもあったり、大きくは、読者の関心、希望によりて、ある一巻を特別にものしたということにもよっているかもしれない。ところで、そういう相違をもっていたとも想像できる源氏の物語がいかにして現在のような源氏物語に固定していったかという過程について、私は一応次の如く考えている。作者はおそらく第一次の段階において紫上系の物語を中心として光源氏の物語を描いて行き、それと併行してか、あるいは第二次段階の初期に並の巻の大部分を含む武田宗俊氏によって玉鬘と呼ばれる巻々の幾らかを書き、第二次段階に入って読者群（あるいは群の管理者）の希望も関係して、竹河・紅梅といった巻、それに宇治十帖などをものしたであろう。（注　この宇治十帖と併行して巣守系の物語が存したという稲賀氏の仮定は、この場合考慮外とする。）その第二次の過程にあっては「更級日記」にもいうように、源氏物語は五十余巻であり、それらは源氏物語の類として存在していたと考えられる。では一体、現行五十四帖に固定化したのはいつであろうか。わたくしは、それを第三次の段階と見て、それを定家や親行の古典校合の時期だと考える。だいたい以上のごとく考えるわけだが、今一つの過程として、作者（あえて紫式部と言わないでおく）の内部における渾沌（カーオス）の時間を第零次的なものとして考えに入れておく必要があるだろう。

（注　この事に関連のある論を中村真一郎の小説にからませて次号（第二十四号）の「国文学攷」で稲賀氏が述べられているようである）しかし、かかる想定つまり読者群の要求によって作者が暗示を与えられて書き継いでいったという事を考慮してみたところで、さして読みを深めることに役立っているとは思われない。さらには、そういう想定を裏づける真跡が現行の源氏物語の中に、その内部徴証として存在していないならば問題にならない。

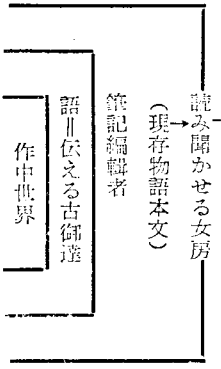
それをわたくしは竹河、紅梅両巻に認めることができると思う。紅梅は真木柱の子たちの、竹河は玉鬘の子たちについての後日談であり、松尾聰博士のいわれる如く「内容的に孤立性があり、年次にもはっきりしないところがあるが問題なのは竹河の巻の巻末近くで、夕霧と藤大納言（紅梅）がそれぞれ左大臣、右大臣に昇進しているにもかかわらず、現在のその後の巻々では、信ずべき伝本に関する限り、あいかわらず右大臣、大納言と呼ばれて夢浮橋の巻を終って」（「源氏物語入門」筑摩書房）おり、しかも紅梅の巻において、薫は紅梅大納言の会話のことば中で、源中納言と呼ばれているところがある。かかる矛盾が生じたのは一体いかなる理由によるものであろうか。わたくしは、この巻の孤立的な性格及び玉鬘の子たちの後日談であるという内容から推して読者群の要請によっ

て第二次的に描き加えられたものであるからと見ている。ことによると、作者も複数なのかも知れない。

現在の竹取物語にまま見られる矛盾―翁の年齢やかぐや姫の大きさ、あるいは、庫持の皇子が、「作った玉の枝を長櫃に入れて、難波から持って姫の邸に行くときに、庫持の皇子はうどんげの花持てのぼり給へりと、いつ聞いたことか世の人々は大さわぎした」（松尾博士前掲書一八四）とある矛盾と昔物語の竹取の話を比較検討した時に推測される結果即ち住吉物語と同様に竹取物語は原作から幾変転かして現在の型に固定したものであるらしいことを、わたくしは、この竹河の本文の矛盾にもある程度までおし及ぼして考えることが可能だと思う。もっとも時期的な問題もこの両者の間に介入して来るので、簡単にその結果だけを適用するなどということはできないが。

それに、今一つ問題なのは竹河冒頭の一文である。この部分の解釈について、玉上琢弥氏の物語音読論からする読み方の方法に大変鋭いものを感じるのであるが、（玉上氏「文学」1952・6・1「源氏物語の構成」角川日本古典鑑賞講座「源氏物語」「物語文学」塙書房参照）物語絵を予想しなくとも源氏物語は十分に読めると思われるし、又物語が、はじめから物語絵の絵解きとしての位置を予定されて製作されたという見解にはむりがあると思はれる。（「日本文学」1950・7・むしゃこうじ・みのる氏『物語と物語絵再論』参照）

もっとも、このむりは、紫式部が、物語絵完成段階の最終過程の最後に位置して、同時にそれを完成させたと考えることによって、解消されると思われるが。



そこで、わたくしとしては、玉上氏の右の図に示されるごとき三人の作者の関係としてこの物語を読んでいく仕方には未だ完全に納得するというところにまで到っていないし、だからといって、稲賀敬二氏のごとく、この冒頭文を「薫・匂宮をめぐる類似構想の二つの物語世界が、併存することに対することわり書きと見る」ことにも、にわかに賛同しがたいと思われるので、この問題として今後に残しておくより他に方法がないが。（注　竹河巻においてのみ玉鬘の呼称が大上となっており、平安末期の物語等にこういう呼称があらわれているという例などがあると好都合だと思っているが、未だつきとめるところにまでいたっていない。だから、かかる宮位の矛盾などが生じているのは、この竹河の巻を管理している読者群が特殊な位置にあった、つまり最初に引用した紫式部日記に道長が未定稿を式部の局からこっそりもち出して伺侍に与えたといった類の事件のために作者の構想の変化がその後に到って生じたにもかかわらず、とうとうその巻を回収してあらためることができずに終わったとか、つまり、ある読者群の希望に応じて一巻が書き下されたが、未だその時には山鹿毅博士の述べられているように第三部への橋渡しとして、この巻を確実に意識してはいなかったためと考えておく程度にとどめておかざるを得ない。又紅梅の巻においても、ほぼこれと同様のことが言えると思われる。以上述べてきたことは、わたくしの以前に発表したものの要旨とは多分に趣を異にしたものである。それは巣守の巻に関する部分を削除したために、全体に大きな変化をきたしたものと考えられる。この部分を取り除いたのは、国文学者に余りにも妄想が欠除していることを感じつつも、文献の多角的な解釈の可能性というものを利用して、大いに妄想をふりまわしている間に、何時の間にか文献資料の裏付けの域を余りにも離れすぎてしまっているという過ちを恐れたためである。

（本学学生四年）